



香川大学医学部附属病院DMATと自衛隊との共同訓練。他にも消防、警察、香川県などとの訓練にも参加し互いの連携を深めています。



香川大学医学部附属病院DMATのメンバーたち。各分野のエキスパートで構成されています。

香川大学
四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構
危機管理先端教育研究センター
特命教授

萩池 昌信

Masanobu Hagiike

はぎいけ まさのぶ

日本DMAT隊員・統括DMAT
DMATインストラクター 香川県災害医療コーディネーター
日本外科学会 専門医・指導医
日本内視鏡外科学会 技術認定医
医学博士

萩池教授は、阪神淡路大震災と東日本大震災の被災地では、DMATではなく外科医として活動しました。その経験で、医療資源と人材の有無の差はあっても、被災地も通常医療も、与えられた環境の中であきらめず救命を指す同じ行為、と感じたそうです。さらに一般的な災害の備えとしても「あきらめない心」を育てることが大切と言います。

「私はバスケをしていたので、『スラムダンク』の安西先生の言葉（最後まで希望を捨てちゃいかん、あきらめたらそこで試合終了だよ）という言葉をいつも心に留めています。自分の命は自分で守る。命があれば前へ進める。あきらめなければ必ず目的地へ辿り着ける。被災時こそ、そう思える心が何より必要です。」

DMAT

「Disaster Medical Assistance Team」の頭文字をとってDMAT（ディーマット）と呼ばれます。

CSCATTT

Command&Control-Safety-Communication-Assessment-Triage-Treatment
Transportationの頭文字を繋げた、災害医療の手順や内容を表す言葉です。災害医療現場で忘れてはならない「魔法の呪文」といわれます。

自分を生かすことをあきらめない

香川が被災した際、香川大学医学部附属病院などの災害拠点病院は、県全体で連携し、通常診療を行いながら被災による重症患者を治療し、他県からのDMATを受入れ、的確に被災場所に送るための指示をしなければいけません。他地域への支援統括は、香川が被災した時の統括の知見蓄積にも繋がるのです。

「彼らも被災者ですから、通常業務ができない病院の支援、避難所の衛生管理などにも協力します」。そのような状況では、情報収集や派遣コントロールなどの業務はより重要性を増します。

創設当時のDMATは、「瓦礫の下の医療」と呼ばれ、災害から72時間以内の救命医療が主な役割でした。しかし現在はその後医療にも活動範囲が広がり、被災者の救援はもちろん、被災地の医療従事者支援も担うように

他地域支援の知見が被災時に役立つ

「災害医療の手順を表す、CSCATTTという言葉があります。最初のCがCommand and Controlを表すように、指揮命令系統の確立は組織化・効率化された支援活動のためには最も重要です」と萩池教授は言います。

「災害医療の手順を表す、CSCATTTという言葉があります。最初のCがCommand and Controlを表すように、指揮命令系統の確立は組織化・効率化された支援活動のためには最も重要です」と萩池教授は言います。

阪神淡路大震災の後、大規模災害の起こった被災地で、急性期に機動的に活動する医療チーム・DMATが考案され、日本全国で組織されました。1人の医師、2人の看護師、1人の調整員を基本に構成され、各員は4日間の専門的な研修を受けて資格を取得します。同一の研修により全国のDMATが標準化された災害医療への共通認識を持つことは、一刻を争う災害現場では大きなメリットとなります。

香川大学医学部附属病院には、医師、看護師、薬剤師、臨床工学技士、事務職員など、多職種で構成される20名のDMATメンバーがいて、今年4月の熊本地震でも早く被災地へかけつけました。けれど、その時、萩池教授がいたのは熊本ではなく香川県庁。都道府県調整本部の統括DMATとして、派遣調整の補助、被災地情報の収集、被災地で活動する香川県DMATへのロジスティクス、被災地のDMATとの連絡調整などを行っていたのです。

災害時の医療を牽引するDMAT

